
『夏の奇跡』

桜坂 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『夏の奇跡』

【Nコード】

N1591B

【作者名】

桜坂 恵

【あらすじ】

離婚後、侘びしい独り暮らしを始めた俺。ある日、たまたま立ち寄ったクリーニング店で一人の女に出会い、一目で好意を持った。菜美。パート勤めの人妻だった。決して許される恋ではなかったが、菜美は俺の好意を受け止めてくれた。そこから、夢のような時間が始まった。二人は共に出会えた喜びで、お互いに夢中になっていた。・・・だが、幸せな時間は、長くは続かなかった。菜美が何の前触れもなく俺の前から姿を消したのだ。「いったい何故だ？」俺は幸せの絶頂から、突然、失意のどん底に落ちていった。

『夏の奇跡』

第1章「出逢い」

彼女と出会ったのは、一昨年の八月だった。

俺は、その年の六月まで、離婚後の二年間を、実家で母親と二人で暮らしていた。親父は十五年も前に死んでしまっていた。俺が実家にいたのは、母親の体調が余りよくなく、心配であったから、と言うよりは、一人暮らしの経験のなかった俺が、離婚後すぐに、不慣れな一人暮らしをする気にはなれなかった、と言うのが本当のところだった。だが、この歳になって、二年も母親と顔を付き合わせて生活することにも、少し気詰まりを感じていた。幸いにして、母親の病状もよくなり、元のように元気で、口うるさい母親に戻ってくれていた。ようやくといった感じで、俺は新しい自分のねぐらを持つことにした。

大阪南部の住宅街。中古マンションが、ぎりぎり手の届く価格で売りに出されていた。不動産屋の案内で、一度見に行き、その場で決めた。

いざ一人暮らしを始めてみると、やはり何かと大変だった。それまでの俺は、親の世話になり、その後すぐ嫁の世話になって、家事など自分で、何一つしたことがなかった。そのつけを払わされている気がした。食事は、ほとんど外で済ませて帰った。休みで家にいる日は、マンションの一階のコンビニに行けば、腹はふくれた。

困ったのは、掃除と洗濯だった。掃除機は、一応買った。買って

はみたが、掃除そのものが嫌だった。引っ越しの後、一、二度使っただけで、掃除機は部屋の隅で、ホースを巻き付けられて、じっとしていた。洗濯は、しないわけにはいかなかった。全自動洗濯機を買った。説明書を読めば、使い方は簡単だった。ボタン一つ押せば、後は洗濯機が全てやってくれた。問題はその後だった。干さなければならず、干せば、取り入れなければならなかった。結局のところ、下着と、ワイシャツを、安い物で、かなりの数買った。それを着尽くすと、実家に持って行った。母親には呆れられたが、そのうち洗濯してくれる人を捜すよ、と言った。

春物のスーツを、クリーニングに出そうと思いながら、ズルズルと放って置いたのも、ただの無精だった。店など、どこでもよかつたが、出す機会を失っていた。随分長い間、スーツを車に積んだままにして、忘れていた。その日、トランクを開けた時に目についた。今日は必ず出そうと思った。結局、毎日仕事に通りがかる、幹線道路沿いのクリーニング店に立ち寄った。

その店で受付のパートをしていたのが、彼女だった。

クリーニング店など初めての俺に、彼女は愛想良く、しかもてきぱきと、店のメンバーカードを作り、少しばかりのシミを鋭く見つけて、それが落ちにくい質のものであることを丁寧に説明してくれた。

色白で細身。指先の使い方が女らしかった。

少し俯き加減に、優しく話す声が、時折少しかすれて、妙に官能的だった。

瞳が涼しげに見えた。清潔感にあふれていた。

一目惚れだった。

翌日から俺は、家中の洗濯物を全部クリーニングするがごとく勢

いで、その店に通った。

彼女の勤務日が月・火・木・金曜の週四日であることは、一週間毎日通えば、すぐに判ってしまった。俺はその四日間のほとんどの日に、彼女と言葉を交わすようになっていた。

彼女はそんな俺を当初はかなりいぶかしく見ていたようだった。

スタンプカードに店の印が二十個貯まった日に、俺は「今日はお仕事何時までですか？もしよかつたら帰りにお茶でも？」後で考えても、顔から火が出そうなくらい、恥ずかしくもありきたりな、そんな言葉で、彼女を誘った。

「はい。少しの時間でよければ。」彼女はそう言って、つたない誘いを受けてくれた。彼女には夫がいて、子供が一人いることがわかった。人妻だろうとは、彼女に会った初めから思っていた。ネームプレートに書いてあった「内田」と言う姓しか知らなかった俺が、「内田さん」と呼ぶと、「菜美です。」名前で呼んでくれてかまわないと言った。内田という姓は好きではないと重ねていった。旦那と上手くいってないのだと理解した。

俺は思いきって、もつとゆっくりと会いたいと言った。次に会える日を聞いた。「水曜なら。」彼女はそう言った。

次の水曜、十時に住之江区のホームセンターで待ち合わせた。あそこは駐車場が無料だから。彼女が笑いながら、そう教えてくれた。ちようど、お互いの家の中間辺りだった。

彼女がホームセンターの駐車場に自分の車を置いて、俺の車に乗り換える。それ以降、俺達が会うときは、ほとんどそうした。その日、菜美は白地に薄い花柄のワンピースでやってきた。白いレースの半袖のカーディガンを合わせていた。清楚な感じがした。白く細い腕が眩しかった。

どれくらい時間があるの？と聞くと、夕方六時までには帰って来られればと彼女が言った。

「明日香へ行きませんか？」と言ってみた。彼女は、「はい。」と言ったあと、明日香には行ったことがないのと言った。一度行きたかったから嬉しい、と微笑んだ。素直な受け答えが心地よかった。平日で、高速道路を使えば、片道一時間の適当なドライブになる。

明日香村は、観光客もまばらだった。幸いにも曇り空で、日差しが緩やかであった。型どおり、石舞台や、飛鳥寺を訪ねたあと、「とっておきの場所があるから」と彼女を誘った。「とっておきってどこ？行きたい。」と彼女は言った。

石舞台から車で十分ばかり山道を上がると、川沿いに「男綱」がある。おそらくはずっと古代から伝わる、子孫繁栄の祈りを込めた神事に使うものであるうか。そこから、さらに数キロ上流にさかのぼると、今度は「女綱」がある。「とっておきの場所」は、ちょうどその中間辺りにあった。

山道のカーブに沿って車を止めた。「ここだよ。」そう言って降りた。あとから彼女が降りた。八月とは思えないほど、爽やかな風が吹き抜けた。ひんやりと心地よい風だった。「気をつけて。」その声を掛けて、川辺への降り口を探した。彼女の足下が気になった。「大丈夫。あたし、こんなの平気よ。」そう言うと、彼女は先に降りようとしたり。「待て待て。」俺は慌てて先にたつた。下から、手を伸ばして、彼女の手を取った。彼女は俺の手をしっかりと握って、降りてきた。

「どう？」俺はそう言って彼女をみた。清流がすぐそばにあった。透き通った水は、激むことなく、流れていた。涼やかな風が、木立の間を抜けて、通り過ぎた。見上げると、頭上には大きく張り出したもみじの葉が、今は青々と生い茂り、夏の日差しを遮ってくれて

いた。

「素敵。きれいな。すごく素敵。」彼女はそう言って、足下の流
れに白い手をそっと入れた。「わあ、冷たい。気持ちいいよ。」そ
う言って俺をみた。下から見上げた彼女の顔は、無邪気な子供のよ
うに、輝いていた。俺はそっとかがみ込んだ。初めてのキスをした。

その次の水曜には、和歌山へ出かけた。阪和道を使えば、片道一
時間もかからないで行けた。浜辺はどこも海水浴シーズンで、人が
大勢いた。海水浴場から離れた岩場で、少しの間過ごした。海
見えるレストランで食事をした。帰り道、26号線沿いのホテルに
車を入れた。

初めて見た菜美は、本当にきれいだった。透き通るような白い肌
が、薄く赤みを差して染まって行った。得難いものの様に思えた。
細くて、しなやかなその躰の、全てが愛おしく思えた。

神戸には特によく行った。神戸なら、海も山も街もあった。お
互いの知人に出会わない場所であることも、俺達にとっては大切な
事だった。初めて菜美にプレゼントを買ったのも、神戸だった。三
宮のアクセサリーショップでイヤリングを買った。秋らしく、色づ
いた葉っぱがいくつか連なったデザインだった。彼女が選んだいく
つかの中から、俺が決めた。高価なものではなかった。大人の女性
へのプレゼントとしては、安物の部類だろう。それでも彼女はとて
も喜んだ。本当に大切にしたい。次のデートの時から、ずっと付けて
いた。

その日も神戸に出かけていた。珍しく、電車で行った。三宮から
ぶらぶらと元町まで、歩いた。途中で食事などしながら、ゆっくり
と過ごした。そろそろ帰ろうと、元町の駅のホームで、梅田行きの

電車を待つていた。その時、彼女が急に「ない！」と言った。イヤリングが片方なくなっていた。どこかで落としたのだった。付近を見回したが、なかった。電車がきた。「仕方ないじゃないか。また買おう。」と俺は言った。すると、菜美は「ねえ、探しに戻っちゃだめ？」と聞いた。「今から？歩いた道を？」驚いた。時間がないし、どこだか全くわからないのに無理だよ。と言いつつ、彼女は、時間は大丈夫だから、一度探させて、お願い。と言った。俺は内心そこまでしなくても思ったが、彼女の真剣さに負けた。

来た道を、探しに戻った。「この辺りでは確かにあった。」と彼女が言う場所まで戻ったが、見つからなかった。仕方なく、もう一度、元町に向かって歩いた。駅のホームで電車を待った。彼女は随分落ち込んでいた。ごめんなさい。と何度も言った。ふいに、俺は、さつきはあちらの階段から上がって来たのでは？と思った。急ぎ足に見に行つた。階段を上りきったところに、それはあった。誰にも踏みつけられることなく、壊れてもいなかった。菜美のところに持つて行つた。

「じゃーん。」イヤリングを見せた。

「えっ！あつたの？どこに？」「よかつたあ。ありがとう。」と言つと、菜美の目がみるみる潤んできた。ちょうど、電車が来た。

「怖いから持つてる。」そう言つて、彼女は二つのイヤリングをバッグに仕舞つた。そのすぐあとで、菜美は耳にピアスの穴を開けた。あのイヤリングは、わざわざ店に出向いて、ピアスに作り変えてもらつてきた。

その後も、時折、出かけた先で、ネックレスなどを買つた。菜美は、そのどれもが、よく似合つた。そして、とても大切にした。六甲で買った「ブルーの天然石トップのネックレス」は特によく付けていた。菜美の白い肌によく似合つた。

ある時、俺が「菜美は何でも大事にするよな。」と言うと、彼女は「どれもみんな、あなたとの大切な思い出だから。」と言った。俺は彼女を力一杯抱きしめた。

菜美と過ごした一年、俺は、本当に幸せだった。菜美は、俺の知る中で、全ての点で、最高の女だった。彼女といると、心から安らげた。彼女は水曜日には決して予定を入れなかった。それは一年間、ずっと変わらなかった。「あなたという時間が一番大切。」そう言つて、俺を喜ばせた。彼女が本心からそう言つてくれていると、俺にはわかった。俺も同じ気持ちだった。俺の仕事の都合で会えない水曜日には、電話で話した。彼女を思うだけで、声を聞くだけで、十分に幸せだった。

俺は、いずれ時期を見て、将来の事を話し合いたいと、そう思っていた。だが、独身の俺はともかく、彼女には家庭があった。子供の事を考えれば、おいそれと口に出せる話ではなかった。俺は、自分の考えを、まだ彼女に伝えることが出来ずにいた。

終わりは、唐突にやって来た。

俺達は毎日必ず連絡を取り合っていた。そのほとんどはメールで。そのメールが二日間途切れた時、俺は、彼女の身に何かあったのでは、と思った。だが、立場上、家への電話などは憚られた。さらに二日、俺はただイライラと、彼女からの連絡を待った。

彼女専用のメールボックスに新着メールの印が付いたのは、四日目の昼過ぎだった。

「連絡しなくてごめんなさい。会えなくなりました。お別れです。今までありがとう。」

お別れ？・・・俺にはとても信じられなかった。連絡の途切れる前日まで、そんな素振りは一切なかった。理由はなんだ？訳が知りたい。そう思ったが、問いただすことは出来なかった。俺達はつき合う前にいくつかの約束をしていた。

「どちらかが別れを切り出したときは、あれこれ詮索せずに、あっさり別れること。」彼女が言い出し、俺が納得していた「約束」だった。

俺に出来ることは、彼女を「忘れる」ことしかなかった。

第二章「試練」

天保山マーケットプレイス。中に得意先の店舗があった。婦人服メーカー直営のブティック。その店舗デザインが、俺の仕事だった。朝から天満橋の本社に出向くと、天保山の改装現場で、トラブルがあったから、すぐ向かって欲しいと言われた。内容を聞けば、電話で済みそうな事だったが、それでもわざわざ足を運んだのは、ほとんど担当部長の顔を立てての事だった。

現場での作業は、ものの十分で終わった。折角来たのだから、少

し他店を見て、ついでに、遅い昼食でも取ろうと思った。そう決めると、急に腹が減ってきた。先に食事をする事にして、二階へ上がった。お好み焼きにした。

去年、彼女と来た。その時にもこの店に入った。彼女とはお好み焼きをよく食べた。いろんな店で。一口に「お好み焼き」と言っても、店によって、結構違うのだと初めて知った。自分一人で食べていた時には、トッピングなど考えもしなかったが、彼女と一緒に食べるようになってから、チーズだの餅だの、いろいろ試した。お好み焼きを食う、そんな何でもない、極普通のことだが、彼女と一緒にだと、とても楽しいことになった。何をしても「イベント」になった。ふいに寂しさが込み上げてきた。もう一年になるのだ。それでも彼女との想い出に出会う場所は、大阪中、どこにでもあった。今日のお好み焼きは、ただの昼飯だった。

他店の偵察は全く気乗りがせず、そこそこにして終わらせた。駐車場に戻った。入り口近くに止めていた。ここだと、出口にも近かった。シートに座り、タバコをくわえた。ジツポアの火を移した。視野の片隅に一台の車が入った。何故か気になって、じつと見た。赤いワゴンR。ナンバーなど見えなかったが、リアガラスの内側に見覚えのある飾りが揺れていた。ドンと心臓が鳴った。見間違いかも知れない。それでも確かめるべきだった。ワゴンRは、今まさに出口のゲートを抜けた所だった。タバコを消しながら、あわてて車を出した。危うく左の車に当てそうになった。

車道に出たとき、ワゴンRが中央大通りを左折するのが見えた。そちらは弁天町から市内中心部方面だった。信号二つの差。アクセルを踏み込んだ。が、今しがたワゴンRが左折した信号で、引つかかった。長かった。イライラする気持ちを抑えるように、タバコをくわえた。ジツポアの火が付かない。三度目でやっと付いた。信号

が変わった。

中央大通りに入った。幸い車は少なかった。すぐにアクセルを踏み込んで、一気に百キロまで出した。目標は見えなかった。少し行くくと、道路は二股に別れていた。中央大通りは緩やかに左にカーブしていた。右斜めに入ると、みなと通りだった。彼女がどちらに行つたのかは、見当が付かなかった。迷っている暇はなかった。「右だ。」とつさに決めた。ウインカーも出さずに右車線に入った。これで会えないなら、それもまた運命だ。そう思った。あの車はきつと彼女だと、走り初めてから、確信していた。みなと通りに入ると急に混んでいた。遠くまで見通すことは出来なかった。しばらく我慢して走った。43号線の交差点まで来て、諦めた。ここからは、大きな道が三方向に出ていた。完全に見失った。

天保山で彼女とすれ違つてから、いや、正確には、彼女の車らしきものを見かけてからだが、ともかく、仕事が手に着かなくなった。一年前、彼女を失った当初も、こんな感じだった。なにもかもが嫌になり、少なくとも一ヶ月は死んだように過ごした。その後、少しずつ、まさに薄皮を剥がすように、心の傷が癒えてきた。それでも、彼女を、完全に想い出にしようには、まだまだ時間が必要だと感じていた。その心の傷に出来た「かさぶた」が剥がされた。心が血を流していた。会いたかった。会って、話したかった。別れの理由は、もうどうでもよかった。ただ、抱きしめたかった。

その夜は、眠れなかった。明け方に「決断」をした。「どちらかが別れを切り出したときは、あれこれ詮索せずに、あっさり別れること。」

その約束を反故にして、彼女を捜そうと決めた。そうせずにはいられなかった。その結果、彼女を傷つけるかも知れない。俺の傷

が、ますます深く、癒えることのないものになるかも知れない。それでも、いいと思った。このままでは、次に進めない、そう思った。決して、大袈裟ではなく、俺が生きていくために必要な決断だった。

次の日から、菜美を探した。一年振りに架けた携帯は、解約されていた。きつと、俺へのメールを最後に解約したのだろーと思っただ。彼女はもともと携帯を持っていなかった。俺と付き合うようになって、初めて携帯を持ったのだ。意を決して、自宅に電話をした。一度も架けたことはなかったが、電話番号は知っていた。NTTの自動メッセージが流れた。今は、使われていなかった。

自宅へ向かった。此花区のマンション。三つの棟が、コの字型に建っていた。そのうちの真ん中の棟だと聞いていた。1107号。ドアポストの表札が違っていた。すぐそばの管理人室に行った。内田さんの知人だと名乗って、行方を尋ねた。一年程前に、売却されて、出て行かれました、転居先はわかりません。と言った。転居先は教えられないのかも知れないと思った。

その時、管理人が、「事件のことですか？」と口を滑らせた。「えっ？」と聞き返すと、慌てた様子で、さも「しまった」と言うように、「いえ、関係ないのでしたら。なんでもありません。ここでは何もわかりませんから。」と言ってガラス窓をピシャッと閉めた。

「事件？」思わぬ単語に動揺した。やっぱり何かあったのだ。菜美の身に、もしくは家族の誰かの身に。それが原因で、彼女は姿を消したのだ。いや、消さざるを得なかったのだ。その事件とは、いったいどんな事なのか？どうすれば調べられるのか？彼女の行き先はどこなのか？俺の頭の中で、様々な疑問が、真っ黒な渦となって回り始めた。

翌日、梅雨の、どしゃ降りの雨の中、もう一度マンションに行った。隣近所の人に尋ねてみるつもりだった。無駄だった。彼女は、ほとんど近所の人と、付き合いがなかった。都会のマンションでは、何も不思議なことではなかった。子供の同級生の親ならば、なにがしか付き合いがあったかも知れないが、それは、探しようがなかった。同じ階の横並びの数軒を訪ねて、この線は諦めた。

昨日の管理人の言葉を思い出した。「事件。」事故ではなく、事件と言った。その言い様は何かしら、犯罪に関する事のような響きがあった。であるならば、その当時、ニュースになっていたかも知れない。俺はテレビを、ほとんど見ない。新聞も細かな記事までは読まないから、気づかずになっていたのかも知れない。

まず、インターネットで探そうと思った。だが、菜美の名前では、それらしいものは、何もヒットしなかった。夫の名前はわからない。事件の内容もわからないのでは、検索のしようがなかった。

次に、図書館に行った。過去の新聞記事をあたることにした。ちようど一年前。どんな類の事件なのか、見当も付かないままに探すのだ。念のため、去年の四月から八月までに絞って、虱潰しに見ていった。気の遠くなる作業だった。新聞に載る「事件」は、大阪府下だけに限定しても、無数にあった。その記事の中から、「内田」「此花区」などのキーワードを探す。縮刷版の文字は、数時間で霞んできた。目が充血した。一日目は、何の収穫もないまま、五時になり、図書館を出された。

二日目、朝からただひたすらに、縮刷版のページを繰った。集中

力がなくなっていた。何か見逃したのではないかと不安になる。午後も黙々と同じ作業を続けた。三時過ぎ、疲労感が限界近くなった頃、それは見つかった。

去年の七月二十五日の記事。探していたキーワードが、突然目に飛び込んできた。それは、ある贈収賄事件の続報記事だった。「内田一郎」「此花区」「横領」などの文字があった。扱いが小さいことから、詳細は、それ以前の日の紙面から探した。すぐに見つかった。

午前中に一度目を通した事件だった。

七月十八日付、東亜新報。『焼却場建設で贈収賄！』『大阪市建設局・担当課長任意同行』『光山建設本社、昭和建設本社など贈収賄容疑で自宅搜索！』『揺れる大阪市。局内ぐるみで関与か？』など大小の見出しが躍っていた。

その事件については、微かな記憶があった。当時は、ニュースで大々的に取り上げられていた。しかし、最近はこの手の「事件」が多すぎた。完全に麻痺してしまっていた。だから、微かにしか記憶に残らないのだ。

第一報が一面トップで報じられたのは、十八日。その後、約一週間はかなりスペースを割いて報じられていた。だが、十日目になると、その扱いは、突然小さくなり、二週間を過ぎると、関連記事はほぼ載らなくなった。今の日本では、連日もつとインパクトのある事件、事故が起こっている。この国は、この街はそこまで病んでいた。

当初の記事には、「内田一郎」の名前は出てこない。この事件で、内田の名前が紙面に出るのは、二十五日が初めてだった。連日の記事を丁寧に読んだ。

平成十年、市議会で新たな焼却場の建設が決まった。国、府からも相当の援助を受け、建設に着手する事になった。建設に付いては、大手建設会社5社の協同企業体で請け負うこととなった。その下請けには、多くの建設会社が入ったが、「昭和建設」はそのうちの一家であり、かなりの規模の工事を受け持った。昭和建設が焼却場の建設工事に携わるのは、今回が初めてであった。どんな会社であれ、「始めて」であることは、別に珍しくはない。ただ、今回、異常であったのは、その「始めての」昭和建設が、工事費の中の、かなりの金額を受注していたことであった。結果的には、この異常さが今回の事件が明るみになるきっかけとなった。要は、「目立ちすぎた」のだ。「もう少し、控え目であれば、おそらくは表面化しなかったのではないか？」皮肉を込めて、その様な記述をした記者があったが、全くその通りであったろう。

贈賄側の昭和建設では、大阪支店の支店長、営業部長他、三名が起訴・送検された。収賄側では、元請けの光山建設から二名、大阪市側では、建設局課長の罪が問われた。結果的に、この事件で逮捕送検される者は、計六名に及んだ。

内田の役どころは、事件の大筋とは違ったところにあつた。内田は、昭和建設の大阪支店経理課の社員であつた。肩書きは「主任」。事件の中枢に関係する立場ではなかつた。しかし、逮捕された。罪状は「横領罪」。贈賄の為に、昭和建設側が、裏金口座を作っていた。その口座の金を着服していたのだ。今回の事件によって、裏金

口座の存在が明らかになった時、内田の行為も同時に表に出た。着服した金は裏金であったが、それでも横領には違いなかった。金額は一億円余り、使い道は主にギャンブルだとあった。

不思議なことに、この内田の「横領行為」は、かなりのスペースを割いて報じられた。紙上では、「昭和建設全体の体質に問題があり、この内田の行為が、その象徴的なものである」との報じ方であった。格好の週刊誌ネタにもなったようだ。「裏金を横領。贈賄会社のとんでもない社員！」と揶揄する見出しが、新聞下段の週刊誌広告に見られた。

二十五日の新聞には、内田一郎の写真、住所が載っていた。妻である菜美や、子供が、どれ程の衝撃を受けたかは、想像出来る。いや、他人が思う以上の、辛い立場であったろう。

去年の記憶を辿った。菜美からの連絡が途切れたのは、七月の終わりだった。おそらくは七月二十六日。三十日には「お別れです。」とのメールがあった。菜美も、夫の会社が事件を起こしたことは、七月十八日には知っていたはずだ。だが、自分の夫は、経理部の主任、事件には無関係だと思っていたことだろう。だから、俺にも何も言わなかったし、いつもと変わらぬ様子でいられたのだ。ところが、二十五日になって、事態が一変した。

その時の菜美の気持ちを考えると、言葉がなかった。新聞社、テレビ局、週刊誌、ありとあらゆるメディアが、取材と称して、菜美と子供達に襲いかかったのだらう。彼ら取材側の言葉と態度は、見えないナイフとなって、菜美を切り刻んだに違いない。

マスコミの報道が、事件の加害者を糾弾するだけに飽きたらず、その家族をも罪人のごとく扱うことは、過去、幾度も問題視されてきた。それでも、いまだにマスコミの姿勢が改まったとは言えない。

菜美やその子供のような立場の人間が、マスコミの襲撃から、自己を守る手段は、ただ一つだった。逃げることに。自分の作り上げた人間関係や、守って来た生活の全てを捨て、マスコミの手の届かぬところへ、他人の目の届かぬところへ、ただ逃げる、それしかない。そして、菜美もそうしたので。小学校四年の娘をも友達から引き離して、菜美自身も、俺から自分を引き離して。人々の記憶の中から、自分達を抹消しようとしたのだ。

哀れだった。哀しみがあふれた。親娘の泣き叫ぶ声が、聞こえた気がした。と同時に、俺は、気づいてやれなかった自分の、無力を悔やんだ。一年前に、もっと早くに、このことをわかってやれていたら、何か手助けが出来たはずだ。

「菜美、どうして言わなかった？」菜美の心はわかった。それを言う女ではなかった。

第三章「故郷」

菜美と娘は、どこへいったのか？おそらくは、菜美の実家。そうではなくては、もう探せない気がした。ただ、俺は確信していた。菜美の行き先は「萩」だと。

山口県・萩市。人口五万九千人の小さな城下町。吉田松陰はじめ、桂小五郎、高杉晋作、伊藤博文など、幕末から明治維新・明治新政府誕生まで、近代日本の夜明けに、大きな働きをした人々を、数多く排出した。

菜美は時折、萩の話をした。幼い頃の思い出話には、菜美が愛し

た祖母の話、よく遊んだ城跡の公園の話が多かった。公園の亀や鯉の話、楽しそうに俺に聞かせた。故郷を懐かしんでいる時の菜美を思い出すと、他に行き先は考えられなかった。両親も健在のはずだった。

萩へ行く。俺はすぐに準備をした。菜美の旧姓はわからない。小さな町だと菜美は言っていたが、それでも、「市」だ。すぐに、菜美の実家がわかるとも思えない。最低、二、三日のつもりで行かなくてはならない。仕事の段取りを付けるのに、二日を要した。飛行機の切符を手配した。

七月六日火曜、伊丹発石見空港行きANA。定刻の九時に飛んだ。石見空港からはレンタカーを走らせた。日本海を右に見ながら、9号線を走った。夏の海はほとんど波がなく、穏やかな面もちで、俺を迎えてくれていた。

一度離れた海岸線が、もう一度戻ってきた。右に見える海は、もう彼女の故郷の海だった。道路沿いに展望スペースがあった。車を止めた。水面がキラキラと光っていた。美しい海だった。タバコをくわえ、ジッポアの火を移した。

ブルーのシエル張り。中央には白いシエルでイルカが泳いでいる。菜美からの贈り物だった。彼女がこのジッポオを選んだ気持ちがあつた。この海の色だった。

市街へは向かわず、城跡へ行った。長州藩・三十六万石の城。ここが菜美のいつも話した指月公園だった。菜美に会う前に、一度見おきたかった。公園の入り口に、大きな駐車場のある土産物店があった。そこに車を置き、城跡へ向かって歩いた。平日で人通りは、

ほとんどなかった。堀に架かる橋の手前に、小さな売店があった。「コイのエサ50円」と書いてあった。堀の水面を見た。碧色の水鯉がいた。色とりどりの錦鯉。悠然と泳いでいた。エサを買った。五粒程投げてみた。投げ込んだエサの、何十倍もの数の、鯉が集まってきた。

鯉は口をパクパクさせて集まったが、エサにありついたのは、幸運なほんの数匹だった。

しばらくは、少しずつ投げて、鯉と戯れた。袋の中身が半分程になったところで、試しに、片手に握れるだけ投げてみた。堀の中は、戦場のようになった。それでも騒ぎはほどなく落ち着いてた。残っていたエサを、全部一度に投げ込んだ。また騒がしくなった。

橋を渡ることはしなかった。車に引き返した。エンジンをかけると、ラジオから「シングルベッド」が聞こえてきた。【あの頃に戻るなら、お前を離さない】じっと聞いた。

「もう、すぐ近くだよ。」心の中で菜美に語りかけた。伝えたい言葉があった。ゆっくりと車を走らせた。彼女が生まれ育った、萩の町は、静かな、きれいな町だった。

まず、市役所に行った。住民票の係に相談をした。

「大阪から転入してきた人を捜しているのだが、調べられないですか？」と聞いてみた。

だが、本人の許可もなく、住民票を出すことは出来ないと言われた。「そもそも姓もわからないのでは、お手伝いのしようがないですね」と、係の女性が言った。もっともだった。親切な人なのだろう。同情したような口振りだった。

次に菜美の母校へ行った。「高校は女子校だったの。」菜美がそ

う言ったことがあった。校名は記憶になかったが、萩に女子校は、一つしかなかった。事務室を訪ねた。一計を案じた。「私の妻が病で、余命幾ばくもない。萩市の実家に行つてしまった、内田菜美という友に会いたがつているが、その友の旧姓がわからない。こちらの卒業生で、今の年令は三十三才。その人の、住所が知りたい。該当年度の卒業者名簿を、見せていただきたい。」自分の名刺と免許証で、身分を明かした上、そのように頼んだ。

応対に出た女性が、「お待ち下さい。」と言い置いて、奥の席の男に説明に行つた。説明を聞いた男は、俺の方をちらつと見てから、首を振つた。俺のところに戻つてきた女性が、さも申し訳なさそうに「すみません。規則で、お見せ出来ないことになっています。」と言つた。俺は礼を言つて、事務所を出た。

校門のところまで来たときに、呼び止められた。先ほどの女性だつた。「卒業名簿はお見せできませんが、私が調べておきます。後でお電話します。その人、おひとりでいいのですね。」と言つてくれた。驚いた。俺は急いで、自分の携帯番号をメモにして渡した。「ありがとうございます。よろしく願います。」と言つと、その女性は「自分の姉と同じ年だから。姉も今、大病をしていて、他人事に思えないから。」と言つた。別れ際、その女性が、「奥様、お大事に。」と言つた。俺は黙つて、頭を下げた。心が痛んだ。心の中で詫びた。

事務所の女性から電話が入つたのは、翌七日の昼前だつた。六日の中に連絡があるものと、勝手に解釈していた俺は、夜遅くまで電話を待っていた。七日も、朝から何度も携帯ばかりを見ていた。待ちくたびれた頃だつた。俺は喫茶店にいた。

その電話で女性は言つた。「遅くなりました。昨日名簿を見まし

だが、お尋ねの年度に、菜美と言う名の人は、おられませんでしたが、そこで、昨夜、同い年の姉に聞いてみました。そうしたら、二年の時、確かそんな名前の同級生がいたが、病気で一年遅れて卒業したはずだと言うのです。それで、今朝、その翌年の名簿を見ましたら、おひとりおられました。多分、この方だと思うのですが。」と言い、旧姓と住所を 教えてくれた。

萩市幸町**、岩田菜美。そうメモをした。これだ。間違いがないと思った。いつか菜美が、子供の頃は病弱だった、と言ったことがある。菜美はその病気について、詳しいことは言わなかったし、俺も聞きはしなかった。その時、菜美は、「今は健康だから」と笑っていた。

俺は、携帯の先の相手に向かって、礼を言いながら、何度も頭を下げた。もし、この女性が応対をしてくれなかったら、また、もし、あっさりとな簿が手に入っていたなら、何もわからないままに、俺は萩をあとにせざるを得なかったのだ。「奇跡」だと思った。

最終章「抱擁」

「岩田」の表札が掛かった家は、住所どおりの場所で、すぐに見つかった。こぢんまりとした、木造平屋建ての家。小さな門柱の陰に、子供用の赤い自転車が見えた。菜美の娘のものかも知れないと思った。門柱の呼び鈴を押した。家の中でブザーが鳴っているのが聞こえた。しばらく待ったが、応答がないので、もう一度押した。

二度目を待つていたように、引き戸が半分開いた。六十才前後の女性。たぶん菜美の母親だろう、いぶかしげにこちらを見て、「はい」とだけ言った。

俺は名前を名乗ってから言った。「奈美さんのお母さんですか？」
「はい。」と母親が応えた。「大阪から来ました。奈美さんはこちらにおいでですね？」と訊いた。母親は曖昧な表情のまま、無言で頷いて、「菜美に何か？」と言った。俺は、「奈美さんと親しくさせていただいておりますが、こちらに引越されたと知り、訪ねてまいりました。事件の事は聞いております。心配していました。」と言った。母親は、ちょっと驚いた様子だったが、もう一度俺の顔をじつと見た後、引き戸を大きく開けて、「どうぞお入り下さい。」と言った。

玄関を入つてすぐの和室に通された。母親は一度奥に下がつて、すぐまた出てきた。母親の後ろに、菜美がいた。俺の姿を見た菜美は、一瞬大きく目を見開いて、それから、うつと声を詰まらせた。母親の横を抜けて、俺の前に来た。俺は、母親の手前も憚らず、菜美を抱きしめた。菜美の躰が、大きく震えていた。声を出さずに泣いていた。俺の頬にも熱いものが流れた。

それをじつと見ていた母親が、震える声で言った。「この子、しやべれないんです。声が出ないんです。」俺は「えっ」と言つたきり、言葉が出なかった。母親の顔には、涙はなかった。穏やかだが意志の強い表情で、俺と菜美を見ていた。俺はのぞき込むように菜美の顔を見た。涙で濡れた菜美の顔。「うん。」と無言で頷いた。哀しそうな目だった。菜美の胸元で、ブルーのネットレスが揺れていた。

事件が菜美に与えたショックは、俺の想像をはるかに超えていた。今日までのいきさつを、母親が話し、菜美が筆談で補足した。

去年の、七月二十五日。いつもと同じ朝だった。夫が出勤する気配がしたその時、玄関先で、人の話し声が聞こえた。何だろうと、玄関へ出たところに、二人の男がいた。奥さんですね？と聞かれ、頷くと、「ご主人を逮捕しました。今から連行します。合わせて、お宅の中を捜索させていただきます。」と言われた。その時には、夫の手には手錠がはまっていたと言う。事態が飲み込めず、呆然としているとところへ、五、六人の男が入って来た。家中をかき回し、夫の部屋から、書類や、通帳の類を、いくつかの箱に入れ、持っていった。

マスコミが押し掛けて来たのは、その日の夕方だった。次々とやって来ては、同じ質問を投げかけていった。「金は何に使ったのか？奥さんも知っていたのでしょうか？」「近所の人が、派手な生活をしていたと言ってますが、奥さんの物も買ったのでしょうか？」菜美は、わけがわからないまま、「知りません。ごめんなさい。」を繰り返した。

翌日には、マスコミの数が増えた。朝、子供が学校へ行く前から押し掛けてきた。娘は、その日から、学校を休ませた。娘は怯えるばかりで、理由は何も聞かなかった。ドアにチェーンをし、カーテンを閉め、じっと夜を待った。中古で買ったマンションは、ドアの前まで誰でも来られた。鳴り続くインターフォンは、配線を抜いて止めたが、ドアを叩く音は止めようがなかった。恐怖と悲しさで、気が狂いそうだった。

外に出たかったが、それは無理だった。娘をおいては出られない。自分とはかく、娘をマスコミの標的にさせることは絶対に出来なかった。ほぼ三日間、冷蔵庫のあり合わせの物だけで、食事を作っ

た。自分はほとんど、食事が喉を通らなかった。二十八日の朝、表のマスコミの質が変わった。前日までは、テレビ局、新聞社のマークがほとんどだった。それが、この日から、明らかに週刊誌やフリーの記者とおぼしき者が増えた。ドア越しに、大声で怒鳴る声が続いた。「おい、家の中に、金、まだ隠してるんだろっ。」警察が、家宅搜索をしたあとで、そんな事はある得ない。それでも、罵声は続いた。「いいよな。俺もこんなマンション欲しいよ。ねえ、奥さん、買ってよ。」

「他の記者や取材陣で、誰か、たしなめる者がいなかったのか。」と聞いた俺に、菜美は、「いなかった。」と書いた。

四日目の朝、冷蔵庫も空になり、どうしようもなくなった。とにかく外に出たかったが、娘のことが心配だった。意を決して警察に助けを求めた。「安全に外に出して欲しい。」そう頼むつもりで、警察に電話をした。その時、自分の声が出ないことに気づいた。

無言電話になってしまった。声を出そうと思えば思うほど、喉に何かが詰まった感じがした。娘にむけてメモをみせた。「助けて下さい、と言って。」娘に受話器を渡した。娘が泣きながら訴えた。しばらくして、マスコミを押しつけるように、数名の警官が来た。警察に警護されながら、表に出た。覆面パトカーで、新大阪駅に向かった。マスコミの追跡は、警察の車が引き離してくれた。「あなた方に、罪はないのに。」と、菜美の声が出なくなった事を知った警官が、言った。

四日間で、唯一聞いた「人間らしい言葉」だったと、菜美が書いた。

新幹線と在来線を乗り継ぎ、萩に着いたのは、二十八日の夕方だった。「あなたへの最後のメールは、こっちに来てから送ったの。」と書いて、菜美は俺を見た。

「その後、大阪に来たか？」俺の問いかけに、菜美は首を振った。天保山の一件を話して聞かせた。全くの人違い、おれの勘違いだった。しかし、その勘違いのお陰で、俺はここまで来たのだ。菜美に逢うことが出来たのだ。

菜美の声が出なくなった理由は、やはり心因性のものだった。医者には、菜美と母親に言った。「少し時間が必要です。急激に、大きなストレスを受けた場合、起こる症状です。外見上は何の異常も見えません。安定剤などの薬と、カウンセリングで、気長に治療しましょう。」そう言ったという。だが、それから一年経つのに治らない。母親はそう言っただけで少し涙ぐんだ。母親はさらに言った。「こちらに来てから、すぐに離婚の手続きをさせました。この子も、孫も、今の姓は「岩田」です。」と。

母親の話が終わった時、菜美がメモを見せた。「今日は七夕ね。」俺は菜美をそっと抱き寄せた。七夕に、俺の願いは一つだった。

菜美の家に一晩泊めてもらった。ホテルは取ってあったが、菜美の母親が、どうしても聞いて聞かなかった。翌朝、菜美の携帯を買いに行った。菜美が話せない以上、何かの時には母親に架けてもらわねばならない。母親に俺への電話のかけ方を教えたが、理解した様には見えなかった。菜美の新しいアドレスを、俺の携帯に入れた。メールを送った。

「毎日連絡しろよな。またすぐに来るよ。」俺の隣で、菜美が返信を打った。

「うん。待ってる。でも、無理はしないで。ごめんね。」

その日の夕方の飛行機を取ってあった。外で食事をした。萩を三時には出ないといけなかった。それまでの時間を指月公園で静かに過ごした。

自宅に帰り着いたのは、九時前だった。下のコンビニで、弁当を買って帰った。

食事の前に菜美にメールをした。返信メールがすぐに来た。食事は後回しにした。

俺 「今着いた。会えてよかった。」

菜美 「無事でよかった。本当にありがとう。お疲れさまでした。」

俺 「お母さんよろしく言っておいて。」

菜美 「うん。わかった。」

俺 俺 「菜美、大阪は怖いか？」

菜美 「うん。大阪のせいじゃないけど。私って、弱虫ね。」

俺 「いや、そんなことないよ。そうか、怖いか。また、行くよ。出来るだけ早く。」

菜美 「ありがとう。でもほんとに無理はしないで。萩は遠いよ。お仕事ガンバって。」

俺 「大丈夫。また行く。」

それから、三時間ばかり、食事も取らず、メールに没頭した。おやすみの文字を打つのが嫌だった。日付が変わって、ようやく、携帯をおいた。話したいことは、いくらでもあった。

午前二時。携帯が鳴った。まだ眠れずにいたが、時計を見て胸騒ぎがした。菜美の携帯からだった。

「はい。．．．もしもし、お母さんですか？」向こうからは、何も聞こえなかった。

「もしもし、菜美に何かありましたか？」俺は猛烈な不安に襲われた。

何か聞こえた。耳を澄ました。咽び泣く声が聞こえた。

「菜美なのか？」その時かすかに、声が聞こえた。

「うん。あたし。菜美。」そう言つと、電話の向こうの泣き声が大きくなった。

「おい。菜美。声が出たのか？」

「うん。」菜美の声は、少しかすれていた。

泣きながら話す時の、あの菜美の声だった。

俺は、聞き逃すまいと、携帯を耳に押しつけた。それでも聞き取りにくかった。

俺も泣いているからだと気づいた。

「あなたのところへ、行きたい。」

菜美は今、確かにそう言った。

「ああ、ああ、．．．おいで。」

携帯の向こうで、しゃくり上げて泣いている菜美に、俺の声は届いただろうか。

完

(後書き)

最後までお読み下さり、ありがとうございます。
この小説には、特に思い入れがあります。
評価・感想など下されば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591b/>

『夏の奇跡』

2010年10月10日01時34分発行